

# PROGRAM NOTE

2019年7月

## 人生の名演奏家 オタバロ村のインカ楽団

まばゆい日差しが照りつけるアンデスの昼下がり、南米 エクアドル北部の山あいのひなびた オタバロ村の若者たちが HCJB のスタジオにやってきました。リーダーは 22 歳のボンボ（山羊皮の太鼓）をたたくミゲル君。ひとまわり小さなギターを弾くセサル君は 10 歳で最年少。それにケーナ（縦笛）を吹くルイス君とボーカルは地元の民族衣装に身を装ったセニョリータ（娘）たち。団員は全部で 7 人。自分たちが選んでつけたグループの名前は「インカ楽団」。

オタバロ村には、インカ帝国の血筋を最も純粋に残すケチュアの人々が農業と編物、織物を中心とした生活をしながら独自の伝統的生活様式を守ってきました。日々の肉体的労働の中で疲れを癒し、明日への活力を取り戻すためには音楽が欠かせませんでした。祭りとなれば村の広場で手作りの楽器をそれぞれが演奏しながら、派手な民族衣装で身を飾り、全員が何かにとりつかれたかのように一日中踊っているのです。音楽は日本の祭り囃子にも似たところがあり、哀愁を帯びたメロディーは妙に親しみが湧きます。俗説では、体格は日中肉中背、赤ん坊に蒙古斑がある、ケチュア語の響きが日本語みたいなどと 民族的な共通点を感じられます。ひょっとして環太平洋の先住民族は太平洋が陥没する前に住んでいた同じ種族ではという仮説まで浮かびそうです。

それにしてもインカの頃には、普段の農作業の際も人々は賑やかに音楽を奏でたと言われています。「ご先祖はボンボとシーク

（多列笛）で囃しながら種まきをしたそうだという話は、子供の頃から聞いた覚えはあるけれど、見たことはないし、両親も知らないらしい」と言いながらも、うねるような節回しに合わせて、男女が交互に並び、地面を踏みしめ踊る様子を見ると、そこにはかつての朗らかな農作業の情景がそっくりそのまま浮かびあがってくるのです。楽器は、何でも自分で作れる人が今も残っていて、笛は固い芦（ヨシ）に穴を開けて作り、太鼓は少々板切れと山羊や牛の皮を使って器用に組み立てます。ギターも狭い店先の簡単な大工道具が置いてあるところで手作りのギターが丹念に作られています。演奏はすべて耳からで、楽譜に釘づけになっている人はみかけません。

険しい山道を老人は息子の肩をかりてゆっくりとたどっていた。「そうじゃ。わしがこの世で一番好きなのは歌じゃった。今も歩きながら心臓が拍子を取りながら、その音を皮と皮の間で響かせとる。お前にも聞こえとるじゃろ。」「うん。聞こえるよ。父ちゃん。」「ど〜ん、ど〜んと生まれた時から鳴とるが、今日は特別によ響いとるわい。」そして、その晩、老人は息を引き取った。歳月が流れ、その子は父親となった。ある霧の深い夕まぐれ、自分の子どもたちが干していたビスカーチャ（兎の一種）の皮を取り入れようとしていた時、ふと昔聞かされた「皮と皮の間で響く」という言葉がひらめきました。皮を仕事場に持ち帰ると、皮を 2 枚選んで丸く切り、それを木の環の両面にあてがって細紐で縫いつけたのです。出来上がったものを片手で持ち軽くたたいてみると、乾いた生命の震えにも似た音が部屋にこだましたのです。家に帰ってきた子供達にこう言いました。「これはな、父さんの心臓の音。山からもらった音だ。この音を一生忘れちゃいけないよ。」こうして、アンデスに生きた民族の鼓動は今も世界の人々の心に脈々と波打っているのです。



ドラムを叩くリーダーのミゲル君

笛吹きのルイス君

↑ 女性のボーカルグループ



レキントビタのセサル君

### サタデー・トーク

### バイブル・トーク

きき手 尾崎一夫 毎週土曜日放送		淀橋教会 峯野龍弘主管牧師 毎週日曜日放送	
7月06日	アルフォンソ正田（ギター奏者）2	7月07日	聖書遊覧バス 旧約聖書 詩篇の旅路
7月13日	アルフォンソ正田（ギター奏者）3	7月14日	リスナーからの手紙（お便り交換の時間）
7月20日	関東地区リスナーの集い（淀橋教会）1	7月21日	聖書遊覧バス 旧約聖書 詩篇の旅路
7月27日	関東地区リスナーの集い（淀橋教会）2	7月28日	聖書遊覧バス 旧約聖書 詩篇の旅路

放送後の番組は、ホームページ (<http://reachbeyond.jp>) のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただけます。（mp3形式）

放送時間：日本時間 午前7時半～8時 15410kHz （再放送） 午後8時～8時30分 15565kHz  
（米国アリゾナ州制作／オーストラリア送信）